

蛇（あが） 執念の塊のような群。山ぐつで河原の石を蹴ると、蛇の雲が唸り声を立てて、おるおるうちに空を真黒にする。黒い小さな奴が、体一面にへばりつく。眼のまわりや鼻の孔と唇のあたりは特に不快である。雨が一滴テントをつつ。奴らも、あらしの気配にあせっている。やがて、ひと塊に集って雨が落ちてくると、敵はたじろぎ、まばらになり、散り散りに消え失せる。テントの中では、杉江氏が、ひさびさの勝利に安堵のためいきをつく。

墓（がま） ある朝、石ころの色をした、三角形のナイルを見た。山鯨魚（さんじゅうぎょ） 沢の水を別に、オタマシウシの細長いような奴。

火蟲（やご） 白蓮洞の深度100mの壁に、ひっついていて、目無しトンボが飛びまわるときに光が来るにちがいない。

蝶（ちょう） 何度でも、人をつこくすにとまりたがる。一種の幻影のように、舞うすがたは、奇怪である。泥戦の中で、何かを伝えようとしている。

蛙（かえる） 彼らは、枯葉のような模様の背をしている。沢の底でぬえている。

虫間（むぐら） ある隊員は、鳥だと信じていた。夕暮、涼風に風鈴がひびくように、鳴く。哀愁をおびたエカ妙な響き。「かほかな」。あのようにならば、どれ相当の心を抱いて、生存しているのかもしれない。そうであるならば、われわれの生存の意味だって、深いものがあるような、気になってくる。

熊（くま） プナの大木には、必ずつめ跡が残っている。人間の手の平ぐらいの大きさ。登るときと、降りるとき、二種類。

蜂（すずめづち） 彼らは、きりぎりす、友好的であった。蛇のように、がうがうしたところがない。

人間（にんげん） ぼろぼろにぬれた服、濡れ、ひきつった顔、殺氣ばいた目つき。ためいきとためいき。彼らは、今日も、昨日も、どとわれ、人夫のように、穴へ降りていった。時には、いちごしくも、苦力の如く、ザイルで梯子を引き上げる。よいとまけの歌が、きこえてくる。闇の中にうごめく、暗い暗い、心。